

景 / 観 / 文 / 化

NPO法人 景観デザイン支援機構 けいかん・きこう

<http://www.tda-j.or.jp>

2017-03-01

目次

P1

■巻頭

「道路は再びパブリックライフの舞台になれるのか？」

／(写真・文) 遠藤 新

P2～3

■TDA NEWS

「景観デザインフォーラム開催報告」

／矢内 匠

■ランドスケープ事情

「広がる街路活用の流れ」

／中野 竜

P4～5

■特集：地域から～その後～

「松本」

／倉澤 聡

P6

■シリーズ：地域から

「結城市」その1

／飯野 勝智

■景観ビジネス最前線

／(株)デジタルキアロ

■ホワイトボード



道路は再びパブリックライフの舞台になれるのか？ ～アメリカ都市に広がるパークレット

モータリゼーションの影響を受けたアメリカの都市では、人が交流・滞留するための場所を再び道路に取り戻そうとする実践が広がっている。写真はサンフランシスコ市の街路のとある駐車帯に暫定設置されたパークレット (Parklet) と呼ばれる公共空間である。2005 年中心市街地の SOMA 地区の路上で地元の設計事務所 ReBar が企画実施した 1 日イベント Parking Day をヒントに、社会実験とパイロット事業を経て、2011 年からサンフランシスコ市が制度化した。すでに北米の 50 都市以上がこれに倣って制度化・事業化している。パークレットはストリートカフェの座席と同様で、店舗等の事業者が自店前の駐車帯に自ら設置・維持管理するものである。カフェ座席との違いは、パークレットが公共空間として常に開放されなければならない点である。そのため、設置場所やデザイン、維持管理について市がガイドラインを定めている。

筆者は昨年、サンフランシスコ市で約 50 箇所のパークレットを調査した。大多数はバス路線や店舗前など公共的なアクセスが得られやすい場所に設置されている。デザインはどれ一つとして同じものがない。ガイドラインでは人間的で好ましいアメニティとして 6 項目 (作り付けの座面、多様な利用を誘発する多様な形状、移動可能なファニチャ、植栽、照明、駐輪設備) の配慮を求めている。その結果、公共空間としての高い包摂性と開放性、(頻繁な維持管理と修繕によって支えられた) 居心地の良さが実現されている。パークレットは街路の美観形成と防犯性の向上にも貢献している。

パークレットは、道路を新たなパブリックライフの場に転換するための戦略と戦術の上に出現したものである。問われているのは、人間中心の道路空間の作り方と使い方である。

工学院大学教授 遠藤 新

TDA 総会記念イベント
『景観デザインフォーラム
～街路の景観デザインと公共空間としての活用～』
開催報告
TDA 正会員 矢内 匠

平成28年11月11日の第11回総会の後、定例総会記念イベントとして、景観デザインフォーラム～街路の景観デザインと公共空間としての活用～が開催された。

TDA副代表理事の倉田氏をコーディネーターに3人の専門家をお迎えし、街路空間の積極的な活用への取り組みやそこから見てきた課題と展望を発表いただいた。また、パネルディスカッションでは、3人のパネリストに会場参加者も交え議論が行われた。今回はそれらの発表内容を編集委員会できりまとめ、開催報告とした。



1 オープニング／テーマを設定した背景について



倉田 直道
TDA 副代表理事
／工学院大学名誉教授

フォーラム開催にあたり、倉田氏より、テーマを設定したねらいについて、説明があった。ニューヨークのブロードウェイやハイ・ラインなど、歩行者空間が都市の中で公共空間として再評価されており、このような海外の大きな流れの中で、国内の街路空間のこれからの在り方、公共空間として利用する場合、どのように利用していけばよいか、事例を通して話していきたいと考えていると述べられた。

2 ストリート空間活用におけるトレンドと課題



泉山 暉威
(一社)パブリック・プレイス・パートナー 副代表理事
／明治大学理工学部助教

泉山氏は、明治大学の教員であり、また一般社団法人で実務に携わる一方、パブリックスペースのWEBマガジン「ソトノバ」(<http://sotonoba.place/>)の編集長として、国内外での屋外空間活用に関するイベントや取組事例の紹介を発信している。

泉山氏が携わった豊島区と共同で行った池袋駅東口のグリーン大通りのオープンカフェ社会実験の紹介を中心に、そこから見てきた空間の利活用について課題について次のように述べられた。

社会実験を繰り返す意味の一つとして、やれることの既成事実を増やしていくこと

が重要である。

ハード整備は多くのノウハウがあると思うが、仮想的な空間活用のノウハウはまだない。業界団体もなく、マーケットにもなっていないので、色々なサービスがない。都市構造とセットになっていない。社会実験を行う目的は、道路空間を活用することではなく、エリアやまちの価値を高めていくことが目的としないと、なんのためにやっているのか見えづらくなると考えている。

また、実施者がイベントの運営に不慣れなところから、運営ノウハウや経営戦略などが不十分であるため、公共空間で稼ぐところまで行っていない。また、アイデアがパターン化していることから、面白さを共有していく必要があると考える。



3 道路空間を広場化した事例紹介 (札幌市北3条広場の設計)



廣瀬 健
日本設計(株)

札幌市の北3条広場は、道路空間を広場化した全国でも先進的な事例であり、廣瀬氏は、実際にプロジェクトに関係し、計画

ランドスケープ事情

広がる街路活用の流れ



単純なベンチを配置した昨年と比較するため、囲み感のあるストリートファニチュアを用意した



休憩施設だけでなく、簡易な案内所としても機能するカウンタータイプのファニチュアも用意

近年、様々な場所で様々な街路活用のカタチが生まれ始めている。その多くが「街路に新たな居場所をつくる」といういわゆる「プレイスメイキング」の文脈で語られている。つまり、もっと街路を有効に活用し、人が集うスペースを創出し、街に賑わいをもたらそうというものである。この稿では、最近、筆者が経験した二つの社会実験を通して、その意義と課題を探ってみたいと思う。

Shinjuku Share Lounge & TOKYO

ひとつ目は2016年9月に実施された「新宿シェアラウンジ2016」である。この社会実験は昨年に引き続き2回目の開催になる。新宿駅から都庁の前をとおり新宿中央公園までつながる通称4号街路の歩道部にストリートファニチュアとキッチンカーを展開し、超高層ビルの足元における賑わいを創出する目的で実施された。

超高層ビルの足元には大きな公開空地が広がりながらも、その利活用や賑わいの創出のための工夫があまりなされてこなかった。これからの人口減社会にむかってオフィスや住居の床面積が供給過剰になることは必定であり、他のビル、他のエリアとどう差別化を図ってエリアの価値を向上させていくかは喫緊の課題なのである。

ふたつ目は2016年11月に実施された「神田警察通り賑わい社会実験」である。この社会実験は地元のまちづくり協議会とUR都市機構によって構成される社会実験実行委員会により開催された。

から竣工まで10年近く事業に携わってきた。

プロジェクトは、札幌市と関係事業者の協力によって、広場と一体とした都市計画事業として進められ、通りと両側の建物の再開発と広場を含め、都市再生特区として整備を行った。

再開発にあたり、沿道の建物の入り口を通りと反対側に設けてもらうことで、通りへの車の通行を不要にしたことで、最終的に道路部分を広場として整備することが可能となったこと、沿道の空間は通常、歩道状空地とすると利活用に制約があるが、札幌市で歩道沿い空地という制度を設け、民間のオープンカフェを設置することを可能にするなど、活用の幅を広げることが可能となった。

広場となった道路部分は、道路交通法が適用されていた認定道路であったが、都市計画道路から都市計画広場として認定し、広場条例を新たに制定するなど、独自のルールを設置することで、道路部分を道路交通法の適用除外にすることにより、活用の自由度を広げることが可能となった。



4

街路の景観デザインと公共空間としての利活用

中野 竜

TDA 正会員／(株)コトブキ



中野氏からは、新宿シェアラウンジ2016の社会実験を中心に事例の紹介があった。

この社会実験は既に2年目で都道上にキッチンカーと休憩施設を配置し、今年は大学、エリマネ、コトブキと共同で来訪者のアクティビティ調査を行った。

2年目となった今年は、今年のアクティビティ調査の結果を踏まえ、会場をいくつかのエリアに分け、その利用状況や家具の使い勝手、利用頻度、時間などを、多角的に調査計測を行った。調査結果は、分析して来年度以降の活動に活用をする。

今回の社会実験の実施に当たり、許可権者である行政との協議には、ルーバーのモックアップを持ち込むなど、丁寧な説明を行うことで、ルールを少しずつ変えていき、できる範囲を広げていけたことが今回の最大の成果であったとのこと。しかし、一つの課題を突破して、そこを足掛かりにしてまた次に進めていくには、とても時間がかかることも同時に感じた。

また、社会実験で使用するプロダクト（街路に置くもの）は、これまで公共空間におかれていた公共資材とは設計思想が変わってきており、安全性、運用上の配慮や、耐久性、メンテナンスなどの知見の蓄積がされておらず、これからの課題であると述べられた。

5

パネルディスカッション

コーディネーター：倉田 直道

パネリスト：泉山 壘威

廣瀬 健

中野 竜

①街路の活用を恒常的なものにしていくためには、海外のオープンカフェのように、店舗が街路を使って食事を提供し、営業しているから持続できるような仕組みを可能とすることも考えなくてはならない。

②公共空間の利用が我が国で日常的にアウトドアのライフスタイルという形で定着するのかどうか？

③それに対して専門家がどのような役割を果たせるのか。

などの意見が出た後、さらに街路空間の利用が、イベントか日常かというところは永遠のテーマであり、現状をみるかぎり、期間限定のイベントになりやすい制度構造になっている等の指摘があがった。

その背景には警察の許可が制度化されていないことや、四季の変化がある日本独特の気候により年間を通して野外が利用しづらいことが挙げられた。

また、利用者側の野外活動の経験不足も日常化への妨げとなっていることも挙げられた。

ただ車道部分のパーキングスペースをパーク化する新しい試みも国内で実施されてきており、公共の外部空間利用については多様な生活形態と結びつきながら、定着化していくことを望む、ということでこのフォーラムの幕はおりた。

TDA 正会員／(株)コトブキ 中野 竜



車道に設置したストリートファニチュアを使ってオープンワークショップを開催した



多様な座り方を可能にし、街具のスペックはまだ検討の余地がある

神田ではミニ社会実験とオープンワークショップの二本立てで行われ、ミニ社会実験のパートにおいて車道の縦列駐車帯にストリートファニチュアを設置した。車道にストリートファニチュアを配置しその中でコーヒーを飲んだり休憩したりしてもらうためには道路管理者（この場合は千代田区）および交通管理者と地道な協議が必要であるが、管理者側も徐々にまちづくりや賑わい創出に理解を示してきており、様々な場所で実施されてきた街路活用の実績が次の新たな可能性につながってきているように感じた。小さな実績を積み重ねてできることを増やすボトムアップ型、タクティカル・アーバンズムが期せずして実践されている格好で、この動きがまちづくりを志向するあらゆる団体ともっと体系的に情報共有されることが、日本の街路活用の新たな段階に入るのに必要な要素であろう。

このように次々と新たな取り組みが生まれてきてはいるが、それに比例して課題が多いのも事実である。ストリートファニチュアの構造や仕様は従来の公共製品スペックとは違うものであるし、関係者協議もまだまだハードルは高い。さらに運営側の体制や万が一の時のバックアップや補償の問題も早めにクリアしておかなければならない。

日本型の街路活用を定着させるためには、これらの課題を認識し着実に一つずつクリアする必要がある。社会実験は課題認識のためのフィールドとして使われるべきであり、社会実験ではない街路活用のカタチが生まれて来る日もそう遠くはないと感じている。

特集

地域から ～その後～

松本

都市計画家 倉澤 聡

「地域から」を掲載し始めてからすでに2年が経過しています。その間に、掲載した地域の環境は少なからず変化しているはずですが。“景観”を扱う拙紙は同時に“時間”を意識する誌面でなければならないと考えています。今後不定期に「その後」をお伝えしていくつもりであります。ご期待ください。

10年の歳月

松本生まれの私が、東京とパリでの学生生活の後、松本に戻って10年が過ぎた。戻った当時は、既存の都市計画や都市デザイン分野のビジネスや公の仕事の枠組みでは、地に足の着いた大切なことがなかなか出来ないと思っていた。何もバックグラウンドがない私が勝手に「都市計画家」を名乗り、時間軸としては遠くを望みながらも、もがきながら試行錯誤し、その時できることを積み重ねようとしてきた。押しかけ手弁当でやり、それを7年ほど続けていると、先行きが明るいとはまだ言えないが少しは生活の糧にもつながるようになった。

まちを面白くする、魅力を感じるまちに育てたいと思いのある松本の方々にも次第に理解されるようになってきて、まちの方々の自主的な動きも広がり始めている。

ふと大学院時代を振り返った時、松本は、日本の中で景観施策をかなり頑張ってきたほうだ、と故北沢猛先生から聞かされたことを思い出した。その時は正直、その言葉に驚いたが、多くの先人となってきた方々の努力の痕跡を見つけ、また長い間努力してきた方々と一緒に活動できたことで、今となってはその意がわかるようになってきた。そのような志の想いをつなげ、魅力を感じるまちに育てる社会の仕組みをつくるのが、これからの世代に託されていることだと感じている。

景観を育てるということ

景観とはある意味結果である。暮らして仕事、遊びなど様々なアクティビティが空間の必要性を生み、そのための空間をつくり日々の手入れが行われる、それを眺めるという行為を通して結果的に景観が生まれる。身近な場所において日々眺める眼差しが無ければ、そもそも良くしようとおもう意図さえ生まれず、表象的なところで景観を良くしようとしても、景観を生み出すメカニズムから景観を捉えなければ、大型の商業施設によくみられる外壁のようにそれはチープなものになってしまう。

だからこそ、景観はそのまちや都市などの、暮らしが包括された文化として捉えられるだろうし、その文化を生み出すことが景観を育てることにつながると思っている。

とはいえ、言うは易く行うは難しであり、試行錯誤を続けて広げているのが今の松本の状況である。まちの良い変化を生み出すために、色々な方と話し、考える機会や、空間をより良く変化させるプロセスから市民の方々と専門家が一緒に考え、パブリックスペースを実際に変化させてみるという取組みなど、できることから仕掛けている松本の経験を紹介したいと思う。

工芸の五月

～地域のブランドをつくる～

直接的に景観を考える取組みではないが、工芸の五月について紹介したい。松本に数多い民藝やクラフトといった工芸関連の工房やギャラリー、クラフトフェアなどのイベントの存在は松本の特徴の一つと言える。そのような松本のすでにある資源をさらに活かそうとしていることの一つに「工芸の五月」という2007年に始まった毎年5月の1か月間にわたる企画がある。2009年からは官民の新たな連携が始まり、美術館や博物館などの行政関連の施設や、まちなかのギャラリーなどを中心に工芸の五月に合わせて工芸に関するさまざま



●クラフトフェア当日の中町の様子 (2016年5月)

な企画が行われている。

美術館やギャラリーの企画だけではなく、独自の企画も仕掛けており、例えば、信州のお酒と食と工芸を掛け合わせた企画「ほろ酔い工芸」は松本市内外から毎年楽しみにしてきてくださる方も多く、クラフトマンと使い手のコミュニケーションのいい機会となっているだけでなく、これから松本をこうしていきたいというような意図を語り合う機会ともなっている。この企画にたまたま訪れた東京の方が、松本にお店を出したいと思いつき、移住してお店を開いた人もいる。工芸の五月に関わっていたことが縁となり、松本に移住したガラス作家もいる。そのような動きがまちの魅力を一つずつ増やし、そのようなお店や工房は、雰囲気も良く景観形成にもつながっていくのだろう。



●ほろ酔い工芸 (2015年5月)

松本に豊富な湧水や建築や土木などのものづくりに関わるまちの歴史を紐解きながら建築家の方々と町を歩く企画「建築家と巡る水のタイムトラベル」も毎年好評だ。しかし、恐らく一番楽しんでいるのは企画側の私や建築家の方々であろう。なんども歩いている場所でも、ツアーを企画するために度々歩くと必ず発見がある。それをただ企画側が楽しんでいるだけではなく、伝わるようにしてツアー参加者にも楽しんでもいただく。その伝わる機会や伝えるツールをつくるのがまちを考えることや、景観形成にとって大切なことだと感じている。

他にも、商店街や地元の人が工芸作家と一緒に訪問者に楽しんでいただく企画を立ち上げ、そのつながりが自らのまちを良くしようと動ききっかけにもつながった事例もある。

また、まちの空間としても工芸の五月の雰囲気を表現するために広報手段としてフラッグや横断幕なども掲示しているが、これも季節限定ではあるが風景をつくることにつながる。

工芸の五月は運営の大変さなど、問題も多いのであるが、工芸という景観とは直接

関係ないようなことを土台にして仕掛け、色々な人が交錯し連携する状況を生み出すことが、まちを面白くし、結果的に景観形成につながると実感している。



●工芸の五月フラッグ (2014年4月)

景観講座・まちづくり講座

～まちを自分達でつくる試み～

景観に対して「関心が低い」ことは、景観形成のための文化を育むためにはどうしても乗り越えなければならない壁である。

松本では、これまで松本都市デザイン学習会という枠組みで、2011年から大学の先生や建築家、商店主、行政マンなどが関わって、都市デザインを考える講座やワークショップを行ってきた。2015年には、松本は城下町だと当たり前前に思っていて、城下町という言葉がなんとなく消費されてしまっているのではないかという問題意識から、その意味を問い直そうと1年間の講座が行われた。これまで講座をやってもやりっぱなしだった反省もあり、今年9月にはその問いに関する本を出そうとも画策している最中である。この本自体がどうなるかはまだよくわからない状況であるが、関心を広げるためには、伝わるツールを地道につくることが非常に大切であり、その一つになればと思っている。

景観やまちづくりに関する講座は、その他にも広がっている。松本では公民館や都市政策課が協働し、2013年から4年ほど景観講座が行われてきた。

始めの2年は、景観とは何か、どう生み出されるのかについて、様々な分野の専門家と参加者の方々がまち歩きやワークショップを通して問いを立てる講座を行った。特に、2年目は人が過ぎたくなる場所、憩いの場としてパブリックスペース捉えながら、実際の空間を観察し、現状の問題点を共有しながら、どうしたら人が過ぎてしまう空間となるかを探る講座を開催した。公園やポケットパークという言葉には、そもそも憩いや人が過ぎすイメージが付きまとっているが、ベンチなどが物理的

に置かれているだけで、実際にはそうでないことを理解し、どうしたら本来あるべきオープンスペースになるのかを参加者の方々が真剣に考えてくださった。

3年目の2015年には、都市政策課の事業と結びつき、小公園を改修するプロセスから市民の方々と話し合い、設計に活かすための講座が行われた。単に良いスペースが、知らないうちにできてしまうと、それはそれで良いことではあるが、景観や街に対する関心を広げるという観点からはもったいないことになる。講座のワークショップにより、参加者の意見がすべて織り込まれることは当然無理であるが、改修の構想のプロセスから関わっていただくことで、公園がより良くなれば、より愛着がもたれる可能性も高まるし、人に伝えたい状況も生まれ、都市デザインに対する理解も深まるきっかけとなる。このようにして実際にいくつかの小公園が改修され、以前は自転車置き場のようなスペースだったのが人の過ごす空間に変化したところもある。持ってきたお気に入りの石ころを埋めてコンクリートの洗い出し作業を行うような改修工場のワークショップも子どもたちは楽しんでくれた。



●公園改修ワークショップ (2016年3月)

改修プロセスから参加型とするオープンスペース改修は、今年も続けられている。今後も、景観やまちを問い適切な問いを立て、観察・リサーチし、解くべき課題を立て、実際に空間の良い変化を生み出すというプロセスがまちの仕組みへと育ち、景観文化の創造につながっていけばうれしいと思っている。



●中町東緑地改修前 (2015年9月)



●中町東緑地改修後 (2016年6月)

歩道

～公共空間の新しい可能性～

パブリックスペースとしてこれから面白そうなのは歩道である。歩道のアクティビティをどう生み出すかが、都市にとって、大型箱型のショッピングセンターでは作ることができない残された魅力一つかもしれない。例えば現在、松本城南西外堀の復元とその横に通る街路の拡幅計画が進められている。街路の事業用地は空き地になっているところが多いが、昨年は一部実験的に人が憩える場として仕掛けをし、今後の街路の在り方を松本市や市民の方々が探っているところである。どんな街路になるのかはまだわからず、単なる四車線の広幅員街路になってしまうリスクも抱えているが、なんとか松本の魅力の一つに育てて欲しいと願っている。多くの方が事業の行方に興味を持っていただければ幸いである。

街路に関しては、制度的や条例といった壁も大きいですが、松本の魅力として、歩道のアクティビティを生み魅力的な風景つくれるかどうかは現在、優先度の高い松本の課題であると考えている。



●街路拡幅事業地の実験的利用 (2016年7月)



●街路拡幅事業地の実験的利用 (2016年8月)

「結城市」 その1

街の資源を次の世代へ



結城の町並み



結い市の様子

つむぎで有名な結城市は、茨城県の西で栃木県小山市と接しており人口5万3千人の地方都市である。ユネスコ無形文化遺産にも登録された結城紬は鬼怒川流域の当地域が養蚕の盛んな地域で古くから織られていたもので、鎌倉から江戸時代にかけて全国に広まり、最高級絹織物として市場に取引されている。その繁栄の名残りとして、駅北部の市街地には「見世蔵」と呼ばれる蔵造り商家建築が約30棟ほど現存しており、細間屋や老舗商店等として今でも利用されている。

しかし近年では、郊外の開発に伴って生活圏・商圏が大きく変化し、北部市街地では空き家・空き店舗の増加や交流人口の減少が顕著となっています。加えて、見世蔵などの歴史的建造物も、維持修繕の手間などが足かせとなり、減少の一途をたどっている。

そこで、現存する歴史的街並みや結城紬・桐工芸などの地場産業に垣間見ることができる、日々の営み・暮らしを結城のありのままの魅力として発信し、北部市街地を活性化していきたいという思いから、まちづくりに興味のある若者が集い「結いプロジェクト」を結成した。

結いプロジェクトは、茅葺き屋根の葺き替えや田植えなどの作業を協力して成し遂げること

を意味する「結い」という言葉になぞらえ、結城市にゆかりのある20～30歳代の若者が集まり、結城市の北部市街地を舞台に人と人との出会い、場所やモノとの縁を結ぶことを基本理念に活動しているまちづくりグループ。市役所・商工会議所職員から建築士、デザイナー、学生、結城紬の織り子まで、多様な立場の若者が集い活動している。

そして私たちは町の中心にある健田須賀神社で行われる秋の収穫祭にあわせ「結い市」を企画した。神社境内や北部市街地に点在する見世蔵、酒蔵、空き店舗・空間などを出展会場とした街なか回遊型のイベントである。街の発展を見守ってきた建物や場所を、現代的な商店やアート空間、コンサート会場として活用することで、建物の歴史的な魅力と現代の価値観とが重なり合い、新しい利用価値を見出すきっかけとなっている。

私たち結いプロジェクトが橋渡し役となり、歴史的建造物所有者の活用意向をくみ上げるとともに、作家やクリエイターに、結い市を通して結城に実際に出演してもらい、イベントによる一時的な利用から将来の恒常的な開放・活用や北部市街地への出店につなげていくことを目的としている。

景観ビジネス最前線

Digital Chiaro
Architectural Rendering Company

想いが伝わる、想いを伝えるCG技術



株式会社 デジタル キアロ

代表取締役：小野寺義勝
副社長・TDA理事：西田幹

本社/仙台オフィス 〒981-3134宮城県仙台市泉区桂1-4-1
URL:<http://digital-chiaro.co.jp/> TEL:022-346-8511 FAX:022-346-8512

東京オフィス 〒111-0032東京都台東区浅草1-34-1中川ビル6F
(担当：應家) E-Mail:ohie@digital-chiaro.co.jp TEL:03-5806-4161 FAX:03-5806-4162

ホワイトボード

< 求む！この欄への投稿 >

公共空間の様々な活用は、成熟社会の大きなテーマです。なぜならある目的のために生まれた公共空間はその社会環境の変化に伴い、役割もかわるはずだからです。しかもいきなりの消滅でなく、スムーズな可変が求められる場合、その空間の可変への多様

な可能性を引き出す“知恵”が必要になります。今号のテーマはこの“知恵”の注出にあります。

TDA NEWS、ランドスケープ事情、地域から～その後～、などそのような視点で読んでいただくと、楽しいかも知れません。

TDA
TDA JAPAN
頒価 ¥200

NPO法人 景観デザイン支援機構 事務局

私達は下記の企業・団体のご協力をいただいています。
(株)昌平不動産総合研究所 / (株)住軽日軽エンジニアリング / 都市環境デザイン会議 / (株)コトブキ / (株)都市環境研究所 / 東京ガス用地開発(株)

〒111-0043 東京都台東区駒形 1-5-6 金井ビル 3F
Tel : 080-6722-4114 Fax : 03-3847-3375 E-mail : main@tda-j.or.jp
<http://www.tda-j.or.jp> <https://www.facebook.com/tda.public>

【編集：(株)アーバンプランニングネットワーク】 2017031000